

健康のひろば

地元の医師がアドバイス

—13—

—三月前から腰痛や脚のしびれ、痛みがあるのですが、たまたま「みのもんた」さんが腰部脊柱に障害があって手術を受けたとのこと、どんな病気なのか。

(美深・社員、五十七歳)

—☆—

ご質問は、腰痛や足のしびれ、痛みがあるとのこと。みのもんたさんの病名は「腰部脊柱管狭窄症」ということになっていきます。まず、腰痛と下肢痛が合併している場合を坐骨神経痛といって、その原因の主なものが腰椎椎間板ヘルニアです。なぜそのような症状が出るかを、図①をもつて説明しますと、腰椎(L)という骨は骨盤の基部にあたる仙骨(S)という骨を土台にして、肋骨のついでい

ない骨のことをいいます。椎間板という組織はその椎体の間にある板状の軟骨でシヨックアブソーバの役割をしています。椎間板はクリームあんの入ったお焼きを想像していただければわかりやすいと思います。ヘルニアという言葉の意味は飛び出す・でっはるといいうことです。ですから腰椎椎間板ヘルニアとは、このお焼きに当たる軟骨がつぶれて、あんの部分が飛び出す・でっはることをいいます。椎間板の膨隆による不安定性と、椎体と椎間板、靱帯などが連なって作られる脊柱管というトンネルの中に軟骨が飛び出して、脊髄から分かれた馬尾神経や神経根を圧迫するた

め、その神経の圧迫症状として腰痛や下肢痛が生じます。腰部脊柱管狭窄症という病気は図②のように、この馬尾神経の通るトンネルが加齢による椎間板の膨隆や椎体の後方の椎間関節や靱帯の骨化・膨隆によって圧迫されて、狭窄している状態をいいます。そのために、腰部痛や下肢痛・しびれのほかに、「間欠性跛行」という特徴的な症状が出現します。この間欠性跛行とは、長距離を歩くことが困難になり、腰をかかめて休み休み歩くことになったり、みさんの

テレビでの姿のように、長い時間腰を伸ばした姿勢で立っていることが出来なくなりなます。みさんの場合はこの狭窄部を拡大する手術を受けて、短期間で現職に復帰して元気に活躍されています。症状の軽い場合には薬物療法や理学療法、コルセットの着用が功

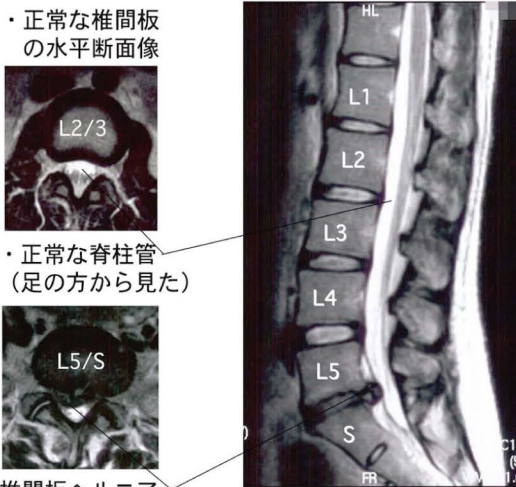
を奏することがあります。病状の程度を知るためにはMRI検査が図①のように威力を発揮します。また、同様の症状を起こす下肢閉塞性動脈硬化症という病気と鑑別しなければい

けません。この場合は、姿勢によって症状が変わることなく、足背部の動脈の拍動が弱くなり、脈派検査でスクリーニングすることが出来ます。

(医療法人社団 名寄中央整形外科院長・坂田 仁)

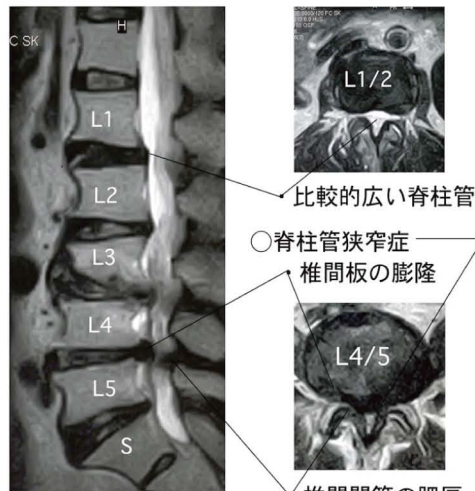


(1)腰椎椎間板ヘルニア



○椎間板ヘルニア

(2)腰部脊柱管狭窄症



比較的広い脊柱管

○脊柱管狭窄症
椎間板の膨隆

椎間関節の肥厚

(左側から見た側面像：左側が腹側)

図1. MRI検査による腰部脊柱管狭窄症の診断

腰の痛みや脚のしびれ